

愛珠

思い出するままに(六)

中村道子



(一) 御堂筋における幼児の交通

一か年の愛珠勤務経験は、私に不安感を、もう持たせなくなっていた。

通園道路の中で一番癌だといわれる所は、今橋通りの御堂筋を越す箇所であった。何分道路の幅が広いので、職員一同は注意に注意を重ね、私が赤旗を持ち、先生二人を交代で当番制にして、毎日三人で渡らせることにしていた。最初小使さんが旗を持つことを不安がって、躊躇していたから、私が西六幼稚園で白髪橋の電車を渡らせる時、赤旗を持って指揮していたから、大体要領はわかっていたが、白髪橋筋の三倍以上も道幅が広いので、非常に緊張してことに当たった。

先ず愛珠園から今橋通りを西へ進み、日本生命保険会社の西南角の人道で、二列を四列縦隊にして隊列を狭め、自転車のみ

時を見計らって、地下鉄入口前の下まで行き、北方の淀屋橋の信号で車が止まる時、南方の平野町信号でも止まって、路面に車数が少なくなり、速度が多少緩やかになって間隔が少してきた瞬間、私が道の中央に走って行って赤旗を出すと、南北共に車が止まるので、幼児に進めと号令をかけると、一斉に四列で西の人道まで走って行き、南北の運転手に私が会釈をして幼児の後を追った頃には、二人の先生から「遊ばずに人道を通って早く家へ帰るのですよ」といわれ、互いに「さよなら」をいって別れていた。

園内での非常待避訓練には、地下室に降りる階段があるが、こは路面であるから動作は楽に早くできた。小使さんもだんだんなれて毎朝赤旗を持って、御堂筋の今橋西角に立ち、まばらに來る幼児を二、三人位まとめて東角まで、何回も連れて来てくれるようになったから安心であった。地下鉄には地下道もできていたが、電車が停車するたびに階段を昇降する人が多いから、かえっ

て管理に困るので路面を通ることとしていた。

幼児が幼稚園生活に大分なれた四月十八日に、また、全地区に警戒警報が発令されたので、いつものようにして避難の練習をしたが、間もなく解除されたので、緊張をほぐすためそのまま外遊びにして、自由に休息を取ることにした。

(二) 創設当初学区内の疑問を解除する

この園舎の建設当時に、参考室として資料が陳列されていた十八坪の室は、今は三十四畳敷の広間に変わり、四枚のまいら戸を左右に開けると、当時撰養室といていた十二畳の座敷と連なつて、大広間になり、四枚の障子を開けると、庭が全部目にはいって、美しかった。そしてその正面に、座敷と対峙して神殿がある。座敷から広い大きい沓脱に降り、飛石伝いに隣に出て、神殿に向かつて立つと、ちょうど視線が一直線になる。創設当時から今日まである神殿だから、六十一年の長い間幼稚園を、見て下さっていたことになる。この神殿を覆って雨露をしのいで共にあったこの覆いの杉皮葺の屋根も、今は疲れを見せ、皇霊殿も古びて来ているから、是も替えねばならぬと思つた。

愛珠の創設に当たつて、種々な経験を重ね、その記憶を辿つて綴られた瀧山さんの園史によると、愛珠が幼児の定員を六十四名としていたが、申込数が意外に少ないので不審に思い、区内の彼

方此方の人に聞きただすと、唱歌を讚美歌と誤解して、愛珠をキリスト教と関係あるものと思ひ違つて敬遠していたことがわかり、驚いて監事をはじめ関係者が、方々で説得すると共に入園の勧誘につとめ、一方神宮司庁にて、皇霊代を拝受して庭園の中央の位置に、社殿を設けたから、西教と関係のないことが一般に知られたので、人々も安心して、入園の希望数が増加して定員に達したそうである。そのため予定通り開園することができ、記念すべき六月一日午前九時の開園式に先立って、午前一時に清祝式を挙げ豊田・瀧山両監事をはじめ、保母やその他有志が参列し、権少講義山本彦兵衛氏が、この祭事を掌られたそうである。幼稚園に神殿のあるのは珍しいことで、創設当時の学区内の世情が、右のような実状だったことに、よつたものである。

開園式には、大阪最初の公立幼稚園のことゆえ、当時の建野知事をはじめ、学務属、東区長、町会議員および幼児の父兄多数が、来賓として参列せられ、盛会だったと記録せられている。

(三) 愛珠創設に東京女子師範学校幼稚園監事の指導と助力

幼稚園開設に当たつて、質問事項を府学務課に問合せて、幼児教育関係の事を知る人がないのか、返答にはいつも要領が得られないので、その後、全部東京女子師範学校附属幼稚園監事

の、小西信八先生にお願いしたら、どんなことでも、懇篤に指導をして戴いたそうである。それ故、六月一日の開園式当日には、小西先生から「サキガケテ、オドロカシケリ、ナニハウメ、アツマノキギハ、ハルシラヌカト」との祝電をちょうだいしたと、瀧山さんは喜んで申されている。そして創設に先立って、区内の良家の子女、山片曾子さんと巽勢以さんの二人を選び、町会からの給費で、明治十一年にできた大阪府立模範幼稚園の、速成伝習生として、日々通学させ、開園前に卒業して帰っていたから、設立の時には実務者として、その準備にはげんだ。しかし何分速成伝習だったから、主席保姆には、小西先生にお願いして、女子師範の卒業生である長竹国子先生に来て貰ったそうであるが、それ以後は、何時も主任保姆も、小西先生に推選していただいたようで、そのご親切に対しては、いつも感謝しておられる。稲葉むめ園長も、お茶の水高師の出身で、はじめ主任保姆として、明治四十四年三月に来園せられたが、四十五年三月に塩野園長の後任として、園長に就任せられ、爾来滿二十年の長い間、重責を全うせられたのである。

(四) 園舎の建築状況

「先生！ 愛珠が建った時には、皆が御殿幼稚園やというて見に行きましてとな、その橘さんも見に行きはったそうでっせ、

なんせ家主さんや、建築屋さん、皆見に行つて、えらいもんですよ、感心しはったそうでっせ」と、先日西六のおばさんに逢った時聞いていたが、橘さんは借家をたくさん持っていて、私が最初に西六幼稚園へ転勤した時分、よく幼稚園からですといつて電話を借りに行つた家である。

何しろ全園舎は、樺材で建てられ、殊に柱は、全部節無しの一八寸角が使われている。長い廊下に、列んで立っている柱も美しく、遊戯室から遠く向こうの倉庫まで、四寸幅の板が、真直ぐ十二筋に張られているから、柱の縦と廊下の横の線が、調和して感じが良かった。ここの建築のために、横堀筋の材木屋に一時材木が無くなったそうである。この前鉄供出の時、係の人が「愛珠から出した鉄は質が良い」といっていたように、建設当時に使われた物は、石材にしても髓にしても、皆吟味せられ、瓦は特別に焼かせたから、こうした物を、総合して建てられた物だけに、御殿幼稚園といわれ、普請に経験ある人が、見学に来たことは当然で、不思議には思わなかった。

「この前、私が遊戯室を掃いていたら、年配の人が入つて来てしげしげと彼方此方を見てはるから、尋ねたら『私は大工でして、昔ここの普請の時、まだ十代の若僧で、親方について来て、仕事をしましたが、今日この前を通つて今頃どうなっているかと思うて、見とうなりましたんで、入らせて貰いました』というて、暫

く見てはりました」と、奥井のおばさんから聞いたので「おばさん良かったわな、私もそんな人に逢うて、種々当時のことを聞き取ったわ」と、残念に思った。愛珠が経た六十余年は、永いようだが人の世の短さを今更のように、私は考えさせられた。

(五) 神殿の改築と遷座

洪庵塾の筋向かいに、芦田さんの家がある。明治維新の頃からいる指物師で、お祖父さんが作られたという、八角で漆塗の玩具を列べるケースを、幼稚園に寄附して貰っている。さすが名人だっただけに、狂いのない良い仕事がしてあるので、長く北浜に住んでおられることと思い、芦田さんに古いこの辺のことを尋ねたら、子どもの時分に、家人から聞かされたあれこれを、私にも聞かせて下さった。それによると、以前私が教生時代に愛珠へ来た時、池の前にあった花壇は、元は二階建の広い家で、洪庵塾の学生が、寮のように寝泊りしていたそうであるが、家がこわされた跡に稲荷社があったそうである。何かしら木がたくさん生えていて、夜は子ども心に恐くて、前を通る時には、知らず知らず走って家へ帰りましたといっておられたことがあった。また芦田さんも二人の子どもたちも皆愛珠の卒業で、子どもたちは今愛日小学校へ通学していて、芦田さんは母の会におられたが、引続き後援会の幹事をして下さっている。

私は毎朝大神宮へ参拝をした。こうして毎日社殿を見るたびに、傷みが相当ひどいから、修理することに決心したのである。修理をするにすれば、この際、位置は山の上に移し、宮の正面から、全園が見下ろされるような、位置に変えたいと思った。

三社作りにして、正面中央には幼稚園が、昔戴いた皇霊代を祭り、向かって左側は御霊神社の御守護を、そして右側には芦田さんのいっておられた地主の神霊を、祭らせていただくことに定め、最近比叡山での修業を終えて、僧籍に入られた方に相談すると、「それなれば地鎮祭に、私が行って上げよう」といって下さったから、次の日曜日に決めた。その日は私が日直をすることにして、校務員と二人で当直し、他の人々には何もいわなかった。そして一方は、先生とその弟子男女合わせて五人が来園して下さり、式を済ませた。それは築山を取巻いて、広く笹を四角に建て、細い縄を四方に張りめぐらし、それに沿って何か唱えながら、なんどもなんども塩を少しずつ撒きながら回られた。

この翌日から、堺市外の黒山にいる、西六時代から世話になっていた植木屋に来て貰い、社殿の横で立枯れていた太い幹を取り除き、社殿を園長室に移して、この土台になっていた自然石の組み立てを解き、その中にあった土を砕いて格好よく周囲の土にならしている間に、片方では石屋がきれいな白い御影石を切って、新神殿が安置出来るように、美しく積み上げていた。またもう一

人の植木屋は、旧神殿の土台になっていた石の形を見ながら、下から新神殿まで、昇り易くするために、何度も一足一足歩いては、石を置く位置を定め、形に応じて固定させて行ったから、以前よりは庭が一層美しく明るくなり、そして神殿の前へも昇り易くなった。神殿の右側からも、直ぐ降りられるようにして、宮の台石から少し離れて、一位の木の根元まで、胡蝶花を五、六株植えて貰った。また、その反対側の斜面を利用して雲梯の下まで、一面に鬼芝を植え、歩行の邪魔にならぬ所に、平戸を三株植え足して山に締りをつけたら、柔らかい感じを持つことが出来た。

五月二十七日の海軍記念日に、端午節句遊びを楽しみ、その翌日神殿の周囲の庭が一応整理出来たので、六月一日に六十二回創立記念式を挙行し、式後引き続き、御霊神社から、神官の園社司に來園を願ひ、大神宮社殿改築御遷座の式を行なった。この日は園児及び愛日国民学校一年生をはじめ、後援会々員が多数参加されて盛大であった。御霊神社の園さんは、昔愛珠の卒園で縁も深く、また、会員ならびに保護者の総代として玉串捧呈を、江戸堀玉水金光教々会の若夫人に依頼したから、難なくことが運び、和気あいあいのうちに終了することが出来たのである。

(六) 戦時下の保育

その後、警戒警報が発令されたが、状況によっては保育を続行

していたり、また、非常の作半を打ち鳴らして幼児を召集し、御堂筋以西と以东との二班に分けて、保母が引卒して帰宅させたこともあったが、いずれも解除され、大事に至らずして済み、安堵したこともある。

また、本園が木造建築である故、周囲の建築物を保護するという意味から、警防団や警察の一部の人も来たが、園の由来をいつて受けなかった。七月に入って警戒警報が発令され、非常勤務用通行証が交付されたり、関係視学が視察に来て督学指導をされたり、保母の錬成会が催されたり、皆戦時下に関係する行事であつて、職員一同はよく励んだ。そして二期の中頃からは、託児的の事務を負うこととなり、毎日始業を午前七時から、終業は午後五時までとし、この希望を取ると、希望者は意外に多く、五十七人にも達した。家庭の人手不足と、雑用の繁多を、現わすものと推測した。そして、今後は戦争に限らず、こうした託児的の事業も、増加することだろうと思つた。

愛珠は市役所に近いし、道も役所からは分り易いから、新聞記者がよく撮影に來たし、放送局へもよく行って、いろいろ録音を取つたりしたので忙しいこともあつたが、それは幼児や保母たちのよい勉強にもなつたと思つている。こんな中でも殊に可愛く思つたことは、十八年の正月を迎え、拝賀式をすませて間もなく、放送局から一月八日には、かるた取りの放送を頼むといつて來

たから、年長児十名を残して、暫く説明し、六日には幼稚園で練習をすることとした。その日は昔の摂養室で、十人の幼児と保護者も加わって練習したが、興がのつて来て、おとも子どもも一団になって、一生懸命団子のようになって遊んだことであった。

そんな姿を見ているうちに、皆が可愛くて、これも戦争がなかったら心から楽しめるのにと、心淋しく感じた。また、幼児の保護者中の出征将士に、幼児の手技を入れて慰問袋を送ったり、今日までに区内における出征者の英霊を二度も迎えたり、また建物疎開をするよう注意を受けたが、いつも承諾はしなかった。影で私のことを「頑固ばば」といったり「ごついおばはんや」といわれたが、私は一向平気であった。——建築資材に目をつけている人もいと聞いたから——戦争は未だそこまで行詰つてはいないと、信じていた。こうした慌しい心持の中に、三月十八日を迎え、第六十三回の保育修了式を挙行し、七十六名に保育証書を渡すことができて、真に嬉しく思った。

(七) 園舎の防空施設

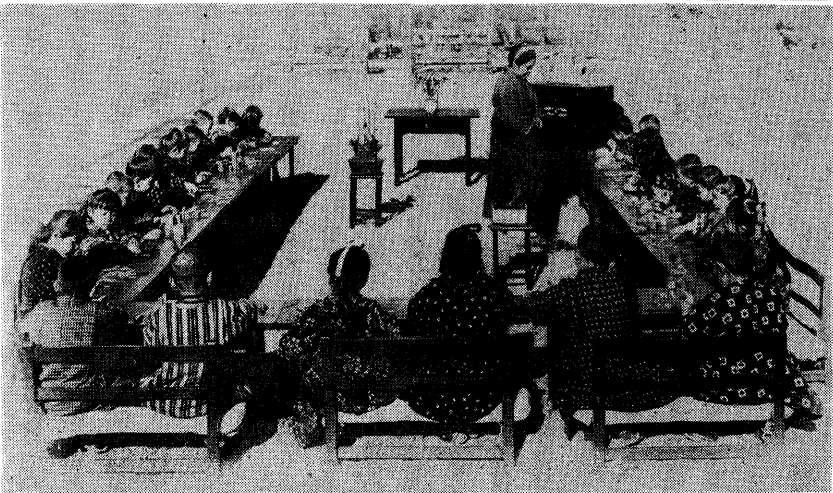
昨年十一月末に、愛珠が木造建築である故に、わざわざ市役所の建築部の責任者が来園せられ、詳細に調査して下さった結果、「木造は天井裏からの延焼が早く燃えやすいからこれを防ぐため、遊戯室から倉庫までの長い天井裏を、壁で三つに仕切ります

が、その仕切りの壁が廊下を通り抜けて、東西の庇まで出ますがそれは許して下さいね、廊下と庇に出る部分は、きれいに目立たぬようにしますけれど」といつて貰ったから、周囲の建物と調和が、あまりかけ離れないようにと頼み、また、二十六日には、防空資材商が建築局の人と共に来て、保育室及び隣接家屋の外側の壁面に、防火改修工事をするといつて下さったから、是も受けた。

ちょうどその頃に、既に遊戯室の高い大屋根の頂上に、三尺平方の檣が出来ていて、それへ昇る梯子が取り着けられ、ものものしい感じを私らに与えていた。それは運動場から遊戯室の庇まで、二尺幅の取りはずしの出来る長い梯子が立てられ、庇には同じ幅の梯子が、大屋根の底下まで取り着けられ、それからまた大屋根まで梯子で昇り、その場から頂上にある火の見檣まで、長く続いている大屋根の取り着け梯子をまた昇り、四曲してやっと檣に着くから、下から見えていても恐かった。大屋根の高さは、隣の日商株式会社社の三階中頃までで、この仕事が出来上がった時、「先生昇ってごらん」といわれたが、直ぐに足は出なかつた。「火事があれば昇って行って、ようすを見ねばなりませんな、そのうちに練習しますわ」といつて、誰もいない時、一人昇って見たが、昇ることは出来ても、降りる時には足がふるえて一步も出がたいので、腰を下ろし屋根の方を向いて、足の方から静かに這うように祈念しながら下りたが、二度とは昇る気はしなかつた。

愛珠・写真集

- (上) ひなまつり(明治二十年前後)
(中) ひなまつり(大正十二年頃)
(下) 室外での設定保育(明治四十年前後)





(上) 自由遊戯

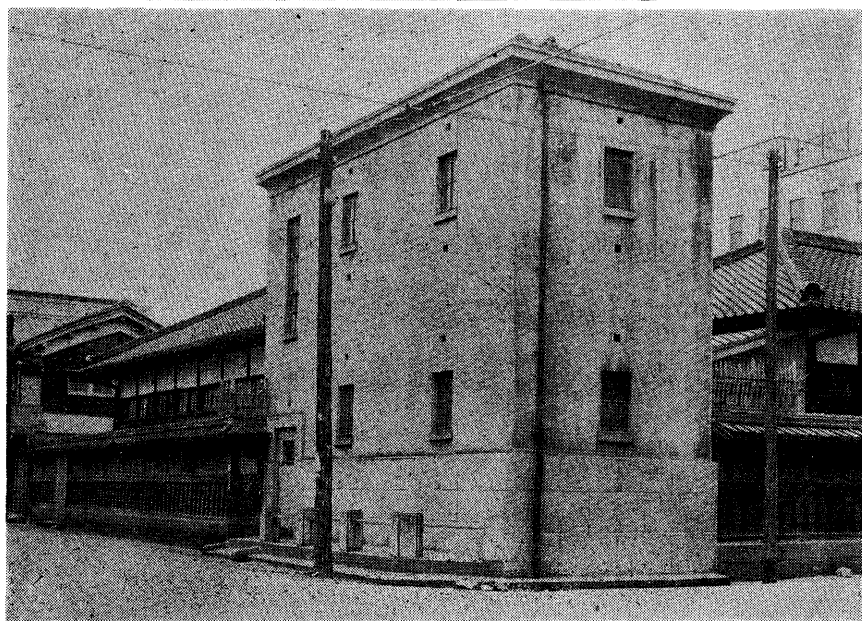
明治三十三年から四十年ごろのもの

(中) 作法(食事) 大正初期

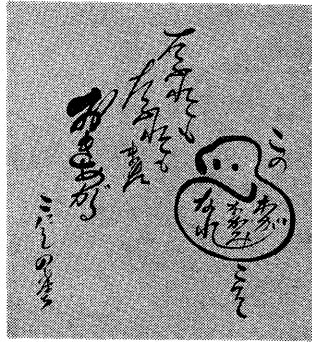
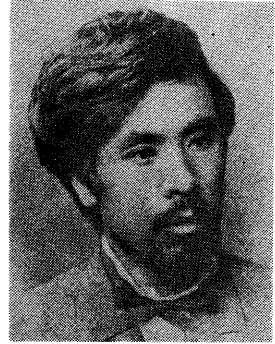


(下)

改築された倉庫
(現史料陳列室)

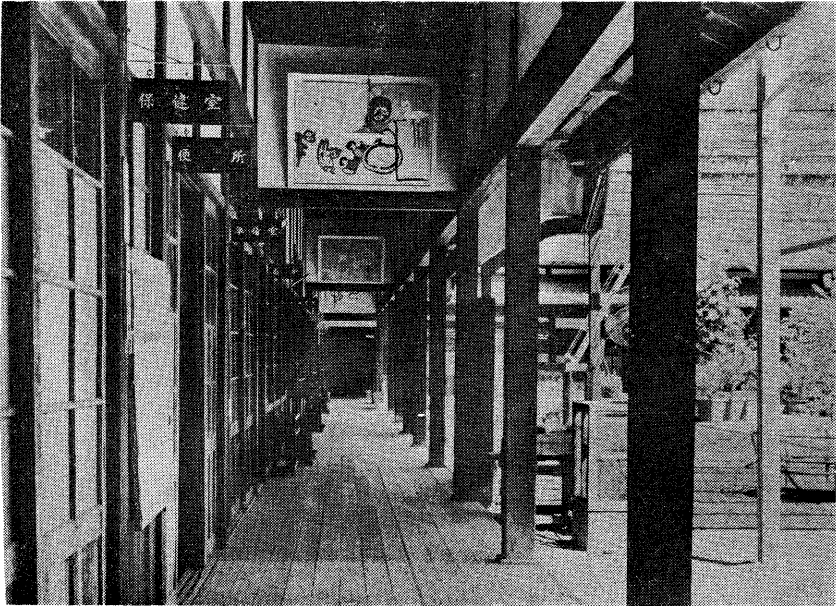


(上) 愛珠幼稚園規則
修正認可の督促



(中右) 東京女高師附属幼稚園監事
小西信八氏の肖像
(左) 小西氏より送られたもの
(氏)の御信条と思う)

(下) 防火施設の一部
天井裏より廊下と庇に作られた壁





幼 児 唱 歌 の 図



修身の図(二) 老人をいたわる



修身の図(一) 父母へのあいさつ